

4. とうや行事にみる歴史的風致

(1) はじめに

とうや（頭屋・当屋）※⁹は、神社の祭や神事、講などの行事に際して、一定の任期でその主宰をしたり、準備や世話をする中心的な人、または家のことで、このような伝統的な役割によって行う神社などの祭祀をとうや行事という。

本市を含む国東地域では、とうやのことをじ がん ほうりもと神元や祝元といい、主宰となる家が属する数軒の家で構成されている神元組の住民が補佐役となって祭祀の準備を担っている。なかでも古式をよく伝えるしらひげ た わら白鬚田原神社やた わらわかみやはちまんしゃ田原若宮八幡社の祝元によるおお たとうや行事をはじめ大田地域では、多くの神社でとうや行事が受け継がれている。

とうや行事の舞台は、神社境内にとどまらず、禊を行うための川や祭祀の重要な要素である餅やどぶろくたんぼの材料である米を育てる田圃、信仰の対象となっている石造物などの注連飾りなどによって形成されている。



神社境内でのとうや行事による祭礼



禊を行う桂川



田圃と歳神社の鳥居



石造物と注連飾り

※9 「当屋」「頭屋」「とうや」など研究者によって様々な表記が用いられる。本計画では、原則として、記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財の名称「国東のとうや行事」に倣って「とうや」と表記することとする。

(2) とうや行事にみる歴史的風致の構成

1) 大田地域のとうや行事の概要

ア) 大田地域の地形

大田地域の地形は南北に長いサツマイモのような形になっており、東西の境を400mほどの丘陵に囲まれ、中央には南北に延びる300mほどの丘陵によって、西の田原谷、東の朝田谷に分断されている。田原谷には桂川・石丸川・釜口川が流れ、朝田谷には俣水川や安岐川が流れる。川沿いの開けた場所を「平」と称し、字名に平をつけて、集落の中で組分けがされている。この平が現在の神元組の範囲となっているところが多い。

イ) 運営組織

当地の神社祭祀は神職を頂点として、神職の補佐として地元から選ばれる宮役と、とうや制による神元または祝元という地元組織によって執り行われる。しかし、宮役や神元の選出方法や任期、役割の幅などは神社ごとに違いがある。

宮役は神饌長、神饌方と呼ばれることが多く、なかには田原若宮八幡社のように代官、鳥追、ゴクシヨ（御供所）という古い呼称を伝えているところもある。また現在の宮役は総代が兼ねる地域が多く、概ね2年交代であるが、諏訪神社のように総代と別に氏子の中から推薦で選ばれ、神饌方3年、続けて神饌長3年、計6年を務めるところもある。宮役は神元組のなかから選ばれるが祭祀では神社側の役として認識されている。

これに対し、地元側で行事の主催や準備をする組織が神元組である。もとは神社ごとに10組以上の神元組があった地域が多いが、人口減少によって組数も減少傾向にある。神元となる家の選出方法は大きく2つに分けることができる。

1つ目は、白鬚田原神社と諏訪神社のように、行事を主催する1戸の家が毎年替わり、その家が属している神元組が一緒に行事の運営を補佐するものである。白鬚田原神社では、主宰となる家を祝元といい、氏子である岡平、立平、穴野平の全戸に輪番に役が回ってくる。また諏訪神社では、主宰する家を当神元といい、氏子全戸の代表者がくじを引き、当神元となる順番を決める。当神元が属する神元組の氏子は運営の補佐となる。連続して同じ地域の家が当神元に当たっている場合、補佐も連続して行った。比枝神社もこの形態に近く、5つある神元組が輪番で祭祀の運営役となる。こちらは1戸ではなく組全体に役が回ってくる。また現在では神元という呼称は祭礼中の台詞では使うが通常は座元という呼称に変更している。

2つ目は、各神元組の中で神元となる家を輪番に定め、各組の神元が集まって祭祀の運営をする形式である。この形式は歳神社、鶴神社、三柱神社であり、諏訪神社も平成時代になってからこの形式に変更した。

また、田原若宮八幡社は昭和46年（1971）に神元組とは別に祝元組という組織を作り、下村の上・中・



左から宮代官、宮司、氏子会長、馬乗

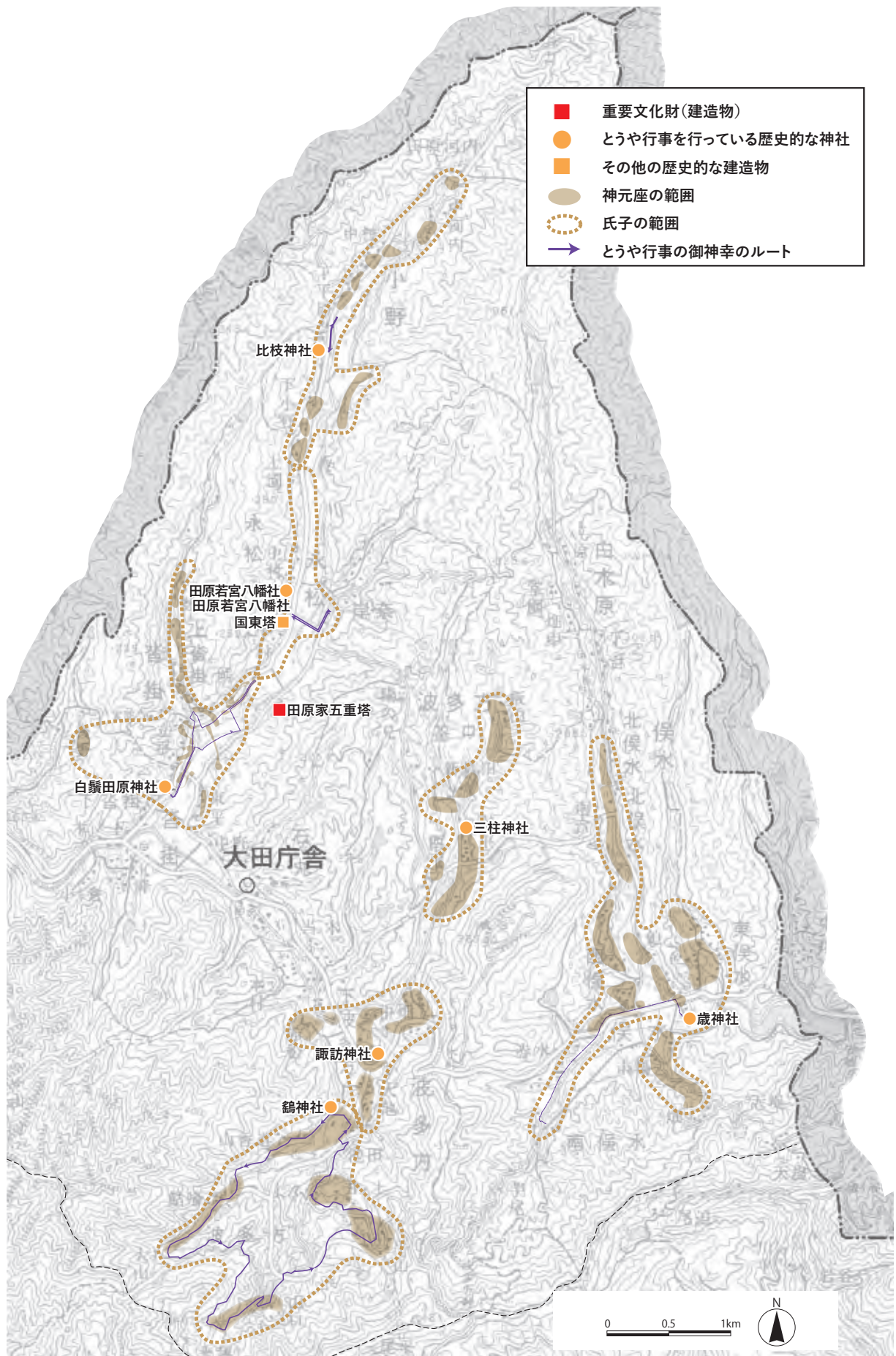
下、中村の上・下、上園で祝元組を作り輪番で運営する先述の比枝神社のような形式をとっていたが、近年では祝元組を永松地区全体で1つにまとめ、もとあった6つの組の班長が祭りの運営に参加している。また田原若宮八幡社では当初の祭祀組織であった神元組も残っており、祭祀の中では神元座を設け、伝統的な形式に則った行事も継承している。

ウ) 歴史

杵築市大田で伝承されている神元による祭祀は、国立歴史民俗博物館研究報告『宮座と社会：その歴史と構造』（2011）のなかでも取り上げられ、白鬚田原神社は弘化3年（1846）の「神官原簿」、田原若宮八幡社は『明治三十八年以降 田原若宮八幡社祭礼控簿』（1905）で神元の活動を報告していることから、このころにはすでに行われていた。また、同報告書には、上記2社同様に、俣水地区の歳神社、小野地区の比枝神社、上波多方かみはだかたの鶴神社、下波多方の諏訪神社、釜口の三柱神社でも神元による祭祀がおこなわれていると記載されており、これらの神社での祭祀も現在まで続いている。

表 大田地域のとうや行事の概要

番号	地区	神元		神元が関わる行事		神元の形態
	建造物	組数	組名			
1	杓掛	4	1岡平・穴野（繰出方） 2立平・岡平（注連方） 3立平（幕方） 4立平・穴野（駕与丁）	9月24日 米洗い 9月25日 醸造始めの祭 9月30日 米洗い 10月1日 掛添い 10月8日 口開祭 10月12日 神元座（霜消し、精進固め） 10月17日 神元座（ハケオロシ） 10月18日 例大祭・御神幸祭 10月19日 終祭（ハタアゲ）	4組の神元組があり、一年交代でその中の一組が祝元組となって祭りの準備を行う。また神元組には繰出方、注連方、幕方、駕与丁などの準備に際し決まった役が割り当てられている。さらに祝元組の中の一戸が祝元となり、年間祭事の一部の全権をもって差配する。	
	白鬚田原神社					
2	永松	16	1十畠、2鍛冶屋敷、3庄屋園、4南の園、5中園、6となり屋敷、7くぬ木、8百迫、9びわ迫、10小迫、11蜷園、12新城屋敷、13瓦下、14上西、15山下、16花の木	10月28日 羽毛降り祭 11月3日 神幸大祭（神元座） 11月4日 ハケアゲ（羽毛揚げ）	本来は16組の神元が祭りの運営・準備を行っていたが、人口減少から昭和45年（1970）以降、祝元という組織を編成し、祭祀の準備を行っている。今でも神元の組織は残っており、祭りの中で神元座は執り行われている。	
	田原若宮神社					
3	小野	5	1田原河内、2中河内、3下平原、4中村、5下小野	11月17日 ハケオロシ祭（羽筆降祭） 11月20日 内役祭 11月23日 秋季大祭・御神幸祭	神元組5組で順に当神元（現在は座元という）を回し、当神元になった組の神元帳に記された住民が、氏子会長、宮三役が祭りの運営と準備を行う。	
	比枝神社					
4	俣水	12	1加治屋、2個人、3上の田、4一ノ上、5一ノ下、6宮ノ本、西側、7畑、新屋敷、8寺山、9小田、10迫、11西ノ上、12南	3月18日 春祭正日 12月6日 神元座（ハケオロシ） 12月10日 冬祭 12月11日 小祭	各神元組（12組）の中で当番となった一戸の代表者が出る。計12人の神元と総総代1名、総代3名、奥方1名がその年の祭りの準備を行う。神元の当番は組の中にある数戸の家で順に一年交代。	
	歳神社					
5	波多方	5	1井ノ上・池田、2井ノ窪・平山、3山口・乗越、4大山・鮎婦、5山香道	1月1日 元旦祭 4月1日 春祭 7月15日 夏祭 11月4日 大祭打合せ 11月10日 精進固め・夜度祭 11月11日 小一郎様・秋季大祭・御神幸祭 12月31日 大祓祭	各神元組（5組）の中で当番となった一戸の代表者が5人集まり、大監督1名、宮付2名と一緒に祭祀の準備を行う。神元の当番は現在の班長と兼務になっているため2年交代で組（班）内の次の家にまわる。	
	鶴神社					
6	波多方	4	1森松、2赤松、3大池平、4中畑	1月1日 元旦祭 4月1日 春祭 6月30日 根付け籠り 10月7日 精進固め 10月9日 大祭 12月31日 大祓祭	一年の祭りの準備を担う家を当神元といい、神元に属する全戸で一斉に抽選し、当神元となる順番を決める。当神元となった家の組は当神元と一緒に祭りの準備を補佐する。 例えば、当神元となる家が森松から3年連続で続けば、森松組の家は毎年補佐をしなければならない。現在は各地区で総代（神元）1名を出し、宮付2名、総代長1名と一緒に祭りの準備を行っている。	
	諏訪神社					
7	釜口	4	1西平、2東平、3新貝、4板山	4月2日 春大祭 12月11日 冬大祭・新嘗祭	各神元組（4組）の中で当番となった一戸の代表者4人が、総代長（神饌長）、総代（神饌方）と一緒に祭祀の準備を行う。神元の当番は現在の班長と兼務になっているため毎年交代で組（班）内の次の家にまわる。	
	三柱神社					



とうや行事に関わる氏子の範囲

2) とうや行事に関連する歴史的な建造物

●白鬚田原神社

白鬚田原神社は、大田地域の田原谷にある沓掛地区を流れる桂川下流域の川沿いに位置する。当社は、和銅3年(710)に沓掛地区の森ノ樹に出現した白鬚宮の神霊を祀って社殿を建てたのが始まりとされている。神社の建物に関しては、明応4年(1495)の宝殿造営棟札、永正5年(1508)の本殿再建棟札、天正2年(1574)の本殿再建棟札、貞享4年(1687)の宮殿建立棟札、元禄10年(1697)の本殿造営棟札、享保7年(1722)本殿拝殿惣門修復棟札など歴代領主による改築の記録が残る。また明治4年(1871)の旧藩神社明細帳には、本殿、渡殿(申殿)、拝殿、神楽家、供物家、役人詰所、番屋、鳥居2ヶ所、門などの建造物に関する記録がある。続く明治23年(1890)の『神社明細帳』には、本殿、假殿、申殿、拝殿、門、神楽殿、神輿殿、宝庫、直会殿、供奉扣所、番屋などの記録とともに和銅3年(710)の創起の内容と明治5年(1872)に郷社となったことが記録されている。

現在は、主神を祀る本殿を中心に両脇に2つの社が建ち、本殿正面には申殿、拝殿が続く。拝殿の左側に社務所が建ち、社務所と左社の間に神輿殿、神饌所^{しんせんしょ}と蒸所^{むししょ}が一体となった建物(供物扣所^{くもつひかえじょ})、酒造小屋が続く。また社務所の境内を挟んで対面には役者敷^{やくしゃじき}(役人詰所^{やくにんつめしよ})と呼ばれる建物が建つ。境内入口には山門があり、石段に続く。石段の両脇にはこれまでの寄付碑や宝暦2年(1752)の銘がある仁王像などが並び、参道入口には文化3年(1806)銘の鳥居がある。

主神の本殿は、正面3間切妻造、正面1間向拝付で、屋根は銅板一文字葺に5本の堅魚木と千木が付く。三方には縁が付く。本殿正面にある申殿は、桁行2間、梁間1間の入母屋造妻入セメント瓦葺で四方に縁が付く。続く拝殿は、桁行11間、梁間2間のセメント瓦葺で、境内からの入り口が三か所あるが、中央のみ1間の向拝が付く。大田地域の拝殿は、そこで神元座による行事が行われるため総じて大きく、白鬚田原神社のものはその中でも最大の大きさを誇る。その他境内には平成10年(1998)に改築された社務所がある。また大壁造、漆喰仕上げの宝物殿前には昭和15年(1940)に建てられた「白鬚田原神社濁酒記念碑」があり、背面に「明治三十年(1897)十月七日濁酒認可」と記され、この時、濁酒醸造を国によって認められたことがわかる。当社では毎年10月の大祭で神元座によって醸造されたとぶろく(濁酒)を参拝客に振舞うとぶろく祭りが行われている。



白鬚田原神社社殿



白鬚田原神社鳥居



白鬚田原神社酒造小屋

●田原家五重塔（国指定重要文化財）

田原家五重塔は、大田地域の杳掛の長福寺境内崖下にある層塔である。角閃安山岩^{かくせん}を使用した、総高4.11mの供養塔で、『大田村誌』（2012）によれば、延元4年（1339）造建であるとされる。とうや行事の祭礼では、御神幸の背景となっている。



田原家五重塔

●田原若宮八幡社

田原若宮八幡社は、大田地域の田原谷を流れる桂川中流の永松地区^{ながまつ}に位置する。

明治23年（1890）の『神社明細帳』によれば、当社の由緒は、養老年中に勧請され田原荘の総社となり、その後は各時代の国主によって本殿等の改修が行われたとある。明治23年（1890）は村社に格付され、本殿、拝殿、直会殿（社務所）、神輿庫のほかに、境内神社として貴船社、神明社、永松社、稲荷社が記録されている。また、『大田村誌』（1966）には、承和6年（839）に社殿を造営し、中近世では、建保5年（1217）、正和5年（1316）、正長元年（1428）、弘治2年（1556）、寛永5年（1628）に社殿の修造が行われ、さらに明治30年（1897）から同35年（1902）に本殿を補修し、申殿及び神門を新築したと記されている。また明治37年（1904）に出版され、県内の神社の様子を銅板画にしてまとめた『大日本帝国大分県社寺名勝図録』により当時の神社の様子がわかる。銅板画と現在の社殿配置を比べると、銅板画では「本社（本殿）」左に稲荷社と永松社、右に大明神（神明社）と貴船社が描かれているのに対し、現在は稲荷社と貴船社のみとなっている。しかし、それ以外は建物の形状、神門前の郷社記念碑や御神木である銀杏（市指定天然記念物）や石造物の位置なども一致しており、往時の姿を留めている。

本殿は、三間社流造の銅板葺で正面、側面に縁が付き、妻部分には大型の墓股に天女の彫刻がある。また本殿正面には、桁行2間梁間1間でセメント瓦葺の申殿、桁行9間梁間2間の切妻造に一間向拝付き、セメント瓦葺の拝殿が続く。銅板画右に「厨舎」とある現在の社務所は昭和8年（1933）2月に新築され、草葺から瓦葺の建物になったことが当時の大分新聞記事に掲載されている。また、境内入口には明治35年（1902）に新築された神門が建ち、石段下には安政2年（1855）銘の石灯籠と明治12年（1879）銘の鳥居が建っている。

大田地域特有の大型の拝殿と新築された社務所では、とうや行事に基づいた神元座による祭祀が年間を通して執り行われている。



田原若宮八幡社拝殿



鳥居



仁王像

●田原若宮八幡社国東塔（県指定有形文化財）

『大分県の文化財』（大分県教育委員会・平成3年発行）によれば、基礎は3重で第3重の4面はそれぞれ2区に分かれ、格狭間が格好よく刻まれている。台座は第3重と1石からなる反花のみである。塔身は棗形。笠は照屋根、軒口は下方が面取りされ、軒反りは両端で急に反転する。相輪は1石からなり、露盤の4面はそれぞれ2区に分かれているが、格狭間も連子も刻まれていない。相輪上部の請花と宝珠は欠失。総高2.44mの秀作である。無銘であるがその形態から鎌倉時代末か南北朝時代と推定される。



田原若宮八幡社国東塔

●比枝神社

比枝神社は、大田地域の田原谷に流れる桂川上流の小野地区に位置する。

創立は、弘仁元年（810）10月15日であると『大日本帝国大分県社寺名勝図録』（明治37年（1904））の銅板画に記載がある。また、拝殿左脇に建つ明治33年（1900）の石碑にも、比枝神社が弘仁年間（810～824）の創立で、日吉神社（滋賀県大津市）の分霊を勧請したことが示されている。『神社明細帳』（明治23年（1890））には雨乞いに靈験のある神社として信仰されていると記載があり、このとき既に人々の信仰を集めていた。

社殿配置は、『大日本帝国大分県社寺名勝図録』（明治37年



比枝神社本殿



村社比枝神社境内之図（『大日本帝国大分県社寺名勝図録』大分市歴史資料館蔵）

(1904))の銅板画からうかがうことができる。本殿、申殿、拝殿を中心に、本殿背面に本殿交代建設地があることや、石段下に鳥居と石灯籠があることなど、現在の配置と一致しており、明治期の様子を現在に伝えている。また、天神宮、浄心禅門旧碑、宝庫（現神輿蔵）、御神木、入口の御門なども描かれており、主な構成も現在に引き継がれている。

比枝神社の中心的な建物は改修されており、現在、明治40(1907)年と同44年(1911)建立の「本殿幣殿(申殿)改築記念碑」が御神木横に並んでいる。

現在の本殿は、三間社流造、屋根は銅板一文字葺で四方には縁が付く。本殿正面には桁行3間、梁間2間の入母屋造平入棧瓦葺、四方に縁を持つ申殿があり、続いて桁行7間、梁間2間の入母屋造平入棧瓦葺の大きな拝殿がある。拝殿正面には1間の向拝が付き、墓股の両面には松と鷹の彫刻が施されている。

このほか、境内には、御神木であるカチシバ(市指定天然記念物)や明和9年(1772)銘がある天神宮の石殿や天長3年(826)銘がある比枝神社古碑(銅板画では「浄心禅門旧碑」とある・市指定有形文化財)がある。入口には御門、石段の下には大正4年(1915)鳥居があり、その両脇に昭和2年(1927)銘の石灯籠がある。

大田地域特有の大きな拝殿では現在でもとうや行事に則った神元座による祭祀が執り行われている。



比枝神社拝殿



比枝神社申殿



比枝神社鳥居及び石灯籠



比枝神社古碑(左)及び天神宮(右)

●諏訪神社

諏訪神社は、大田地域の田原谷に流れる石丸川の中流から少し東に上った波多方地区諏訪台と呼ばれる小高い位置にある。波多方の地は、宇佐八幡宮(宇佐市)と八幡奈多宮(杵築市)とのあいだを行く宇佐八幡宮行幸会の経路になっており、本社ができて以降は経由地として甘酒をふるまうのが通例となっている。これは現在の祭礼でも引き継がれており、10月の大祭では必ず甘酒を造り、参拝者に振舞っている。

明治6年(1873)に村社となったことが『神社明細帳』(明治23年(1890))に記載されており、本殿、拝殿とほか2つの建物の記録があることから、本社はこのころにはすでに存在したとわかる。また『大日本帝国大分県社寺名勝図録』(明治37年(1904))に

は、「火災によって縁起皆亡すとしながらも口伝として、仁寿元年(851)に諏訪大明神(長野県)の神託によって、波多方地区に分霊を勧請した」ことを起源としている。

社殿については以下のような口伝が残る。「寛政6年(1465)に大友親繁により社殿が改修されたのち、永禄12年(1569)には大友宗麟の政策である神社仏閣破却によって社殿を失った。その後、天正2年(1574)に当地の住人が草刈をしていたところ諏訪明神が化身した白蛇、白狐が現れたことに驚き、持っていた鎌で対抗したところ、社殿再興の神託を受け、天正9年に(1581)に社殿を再建した。文禄2年(1593)の大友氏豊後国除国に伴う社領の召し上げにより荒廃するが、住民によって社殿や回廊(拝殿)の修繕を加え、往古の形を残した。」ちなみに先述の鎌が由来となって、本社紋は鎌となり、祈願に来た参拝者は大小の鎌を奉納している。

現在の本殿は、一間社流造で板葺屋根、左右には脇障子と縁が付き、覆屋で囲われている。本殿正面には、桁行2間、梁間1間に入母屋造平入のセメント瓦葺の申殿があり、続いて桁行5間、梁間2間の入母屋造平入セメント瓦葺の拝殿がある。拝殿には1間の向拝があり、墓股には紋である鎌が彫刻されている。拝殿内にある平成21年(2009)の「神殿改修寄付者芳名録」や境内にある昭和49年(1974)銘がある「申殿拝殿社務所改修寄付芳名碑」により、近現代に本殿、申殿、拝殿、御供所、社務所が改修されたことがわかる。

また、『大日本帝国大分県社寺名勝図録』(明治37年(1904))の銅板画には、境内の社殿の配置も描かれている。明治期の境内は本殿を中心に申殿、回廊(拝殿)があり、本殿左に宝庫、右に別神を祀った石祠や鳥居がある。また、御供所、社務所、手洗、御門も描かれ、境内外参道には鳥居と掲示板がある。

現在の境内の配置と比較すると、御供所と社務所は明治期の位置から拝殿横まで移動し、御門もなくなっているが、明治の元号が掘られた手水、境内外の宝暦7年(1757)銘の鳥居、参道入口の掲示板などは銅板画に描かれたものと同位置に今も残っていることから社殿配置は大きな変化はなく現代に継承されている。また、社務所での直会、御供所での甘酒造りなど祭礼での建物の使用方法も受け継がれている。



諏訪神社拝殿



諏訪神社社務所



諏訪神社手水



諏訪神社鳥居

鶴神社は、大田地域の田原谷に流れる石丸川中流波多方地区の川沿に位置する。『神社明細帳』（明治23年（1890））には、当時の建物として本殿、拝殿、申殿、神楽殿の記録がある。また『大日本帝国大分県社寺名勝図録』（明治37年（1904））には、寛永2年（1625）に波多方橋右衛門重貞という人物が古老の口伝と古記を書き抜いたとされるものを参考に社伝を記している。これによれば、白鳳10年（682）に八面大明神が雷鳴と共に顕現し、これを氏神として山頂に社を建てたことに端を発し、弘仁3年（812）に社殿を山麓の現在の場所に移したという。その後の社殿に関する記述には、弘安6年（1283）に大友貞親による修造、文禄2年（1593）に大友氏の豊後国除国に伴う社領没収により社殿が荒廃したため氏子が私財を出して諏訪神社と共に修繕、元和6年（1620）の火災により社殿、申殿、回廊（拝殿）を焼失したなどとある。この元和6年（1620）の火災の際、霊鷹に化身した神が再び顕現し、その神託により元和7年（1621）に社殿を再興して、『大日本帝国大分県社寺名勝図録』の社伝の記載当時の寛永2年（1625）に至ったとしている。

現存する本殿は、三間社流造で、屋根は銅板一文字葺、左右には脇障子と縁が付く。妻部分には鷹の彫物があり、大田地域では珍しい尾垂木や二重支輪の組物が見られる。また本殿脇には「神殿改修記念碑」と彫られた石柱が建つことから近現代において何らかの改修が行われたものと考えられる。本殿正面には桁行3間、梁間2間の入母屋造妻入、セメント瓦葺の申殿があり、さらに桁行7間、梁間2間の入母屋造平入、陶器瓦葺の拝殿が続く。拝殿正面には1間の向拝で軒裏は扇垂木、屋根は入母屋造となっている。拝殿と社務所の間には平成14年（2002）の鶴神社社殿改築記念碑が建つが、これは社務所新築記念碑である。

銅板画を図録にして刊行した明治37年（1904）時には、境内に本社（本殿）、申殿、回廊（拝殿）、宝蔵、社務所、手洗、御神木、御門などの建物が描かれており、境内外の右側には小一郎社、左には稲荷社、御池があり、左端には御旅所として諏訪神社が描かれている。描かれている建物のうち、御門以外はいずれも同位置に現存しており、小一郎社のように祭礼行事の一端として信仰され続けているものもしっかりと描かれている。



鶴神社申殿及び本殿



鶴神社拝殿



鶴神社石灯籠



鶴神社鳥居

このほか、境内には、石畳参道の横には文化14年(1817) 銘の石灯籠が建ち、境内外の参道には寛文12年(1672) 銘の鳥居が建つ。現在は、道沿いに昭和4年(1929) 銘の鳥居も建っている。

拝殿では現在でも神元座による祭礼が行われているだけでなく、銅板画下端にも記された沐浴場を現在も禊の場所として利用するなど往時の様子を伝えている。

●三柱神社

三柱神社は、大田地域田原谷の筧口地区を流れる筧口川上流の沿いに位置する。

『神社明細帳』(明治23年(1890))には、由緒不詳、明治6年(1873)に村社となり、当時は本殿、拝殿、舞殿があったとある。社伝によれば、天文2年(1533)に中山田長五郎惟次によって社殿を造営したという。中山田家は弘和2年(1382)から白鬚田原神社の弁官という役に任ぜられている。役割は神輿を建物から出すときの道布を敷く。同様の内容は『大日本帝国大分県社寺名勝図録』(明治37年(1904))にも確認できる。当時の三柱神社は崖を背にした本殿を中心に申殿、回廊(拝殿)と続き、拝殿左には御供所、御神木、正面には石畳と御門がある。門下には長い石段があり、入り口には鳥居が建つ。これら社殿配置は概ね変化はないが、現在御門や御神木はなく、手洗も石畳左から右に移動している。

本殿は一間社流造、屋根は板葺、両側面に脇障子と縁が付く。本殿全体に覆屋がついているが、これは銅板画にもみられるため、明治期にはすでにこの形態であった。本殿正面にある申殿と拝殿は一体化している。拝殿は桁行5間、梁間2間の入母屋造平入瓦葺であり、正面には1間の向拝が付く。拝殿の梁には、近代の改修記録を木板墨書きしたものが多数あり、釘で固定されている。これによると昭和45年(1970)に申殿改築によって拝殿と申殿の床を一続きにしたことがわかる。平成4年(1992)には銅板画の御供所の位置に社務所新築工事を行い、平成23年(2011)三柱神社改修工事は拝殿等の葺き替えがなされた。また御神木の松は昭和47年(1972)に松喰虫の被害にあい売却した記録もある。石段下には大正14年(1925) 銘の鳥居、安永9年(1780) 銘の石灯籠が銅板画同様にあることから、近現代の改修も明治以前の様相を引き継いでいる。

大田地域特有の大きな拝殿では現在でもとうや行事に則った神元座による祭祀が執り行われている。



三柱神社拝殿



三柱神社鳥居



三柱神社鳥居横石灯籠

●歳神社

歳神社は、大田地域の朝田谷を流れる安岐川と白木原川の合流地点の俣水地区に位置する。

『神社明細帳』（明治23年（1890））によれば、歳神社は文武3年（700）に勧請されたが、応永年間（1394～1428）の火災によって由緒等に関する一切を焼失したとあり、当時の建物として本殿、拝殿、社務所、宝庫が記録されている。創建に関する内容は『大日本帝国大分県社寺名勝図録』（明治37年（1904））にも同様の年号が確認できるが銅板面に描かれた明治期の建物は明細帳よりも多い。銅板画には、本社（本殿）、申殿、回廊（拝殿）を中心に、拝殿左側に宝庫、右側に社務所、厨舎、正面の石畳の左に手洗、入口に御門が描かれており、御門以外は現在の社殿配置同様である。

本殿は、総ヒノキによる三間社流造、屋根は銅板一文字葺で、四方に縁が付く。本殿妻部分には緻密な鴨と雲と波の彫刻、桁隠や海老虹梁に至るまで細部にまで雲の彫刻が施されている。本殿正面には、桁行2間、梁間2間の申殿と桁行11間梁間3間の拝殿があり、屋根のみが一体となっている。拝殿は入母屋造平入のセメント瓦葺で、長押部分には透かし彫り風の鴨の欄間が付き、前面に1間の向拝がある。向拝の屋根は入母屋造になっており、鬼瓦には丸に歳（とし）の字の紋がある。また軒裏は扇垂木になっており、蟄股には竜虎の彫刻にガラス製の玉眼を入れるなど細部にわたって豪華な意匠がほどこされている。

拝殿内には昭和37年（1962）や昭和46年（1971）の申殿、拝殿、社務所の瓦葺替工事や平成14年（2002）の本殿土台改修などの記録が木板墨書で残されているが、これ以外に大きな改築をした記録は見られないことから、申殿、拝殿、社務所及び本殿は少なくとも昭和37年（1962）から大きく変わらない姿を留めていると考えられる。

このほか、石畳の参道の左右にある寛政11年（1799）銘の手水、文化5年（1808）銘の石灯籠や石段下には元禄8年（1695）銘の鳥居がある。

歳神社の拝殿も同様大型で、今でもとうや行事に基づく神元座によって年間の祭事が執り行われている。



歳神社本殿



歳神社拝殿



歳神社手水



歳神社鳥居

3) 主な地域のとうや行事

3)-1 白鬚田原神社のとうや行事

ア) 白鬚田原神社の行事に関わる組織

白鬚田原神社の行事に関わる組織には大きく現在の神社制度に関わる組織と伝統的なとうや制に基づく地元組織がある。神社側の組織の役割は、神職である宮司を筆頭に、弁官（中山田家の世襲）、神饌所（氏子の中から1名永代）、杜氏（氏子の中から1名永代）、杜氏助手（氏子の中から1名永代）、楽人（氏子の中から8人永代）、氏子会長（氏子全体から1名3年任期）、担当総代（穴野平、立平、岡平の各地区から1名ずつ2年任期）がある。これらを総じて宮役という。このほかにも氏子には中心となる穴野、岡平、立平地区以外に、石丸地区、笠口地区の住民が含まれる。石丸地区は御神幸の時に加勢し、さらに御神幸の楽人も担う。そのため石丸地区の総代長が宮役として参加する。宮役は、年間の行事のすべてに参加し、神職の補佐をする。

これに対し、先の宮役とは異なる地元独自の組織で、穴野平に2組、立平に3組、岡平に2組の1組あたり4～5戸で構成された神元組がある。例大祭と酒造の主宰者となる祝元は、この7組を輪番に回り、さらに組の中で輪番に1戸が担う。ちなみに祝元がいる組は祝組^{ほうりぐみ}として例大祭当日の給仕などを祝元と一緒に補佐する。祝組になっていないほかの神元組にも例大祭に関わる役割がある。繰出方^{くりだし}（穴野平1組・岡平1組）、注連方^{しめ}（立平1組、岡平2組）、幕方^か（立平2組）、駕与丁方^{かよちよう}（立平3組、穴野平2組）といった準備が各組に永代で引き継がれている。これらの役も各組で輪番でまわる。つまり、役がまわってきた家を神元という。かつては神元組が17組あり、役も9つあったが人口減少により現在の数に縮小している。

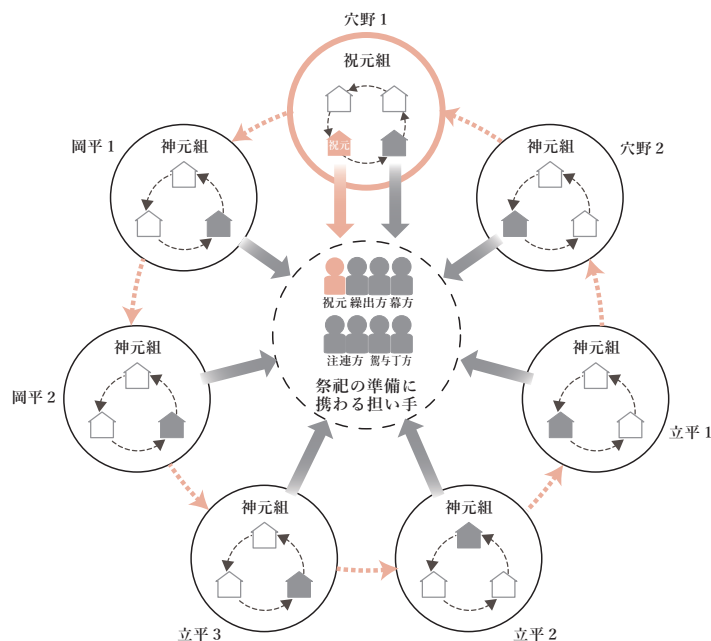


図 祭祀の運営に携わる地元組織の体制

イ) 白鬚田原神社の年中行事

現在の白鬚田原神社の年間の行事は27日ある。宮役が主催となる神社祭事は小祭と大祭あわせて10日であり、祝元や神元が主催となるとうや行事は、神社の清掃活動も含めて20日ある。小祭は宮役のみで行われ、大祭には祝元や神元が神事に参列する。また、10月12日の潔斎祭、同月17日の前日祭、同月18日の例大祭・御神幸祭では、宮役主催の神事と祝元主催の神元座（とうや行事の行事の1つ）が同日に神社で行われる。さらにとうや行事の中には、醸造始めの儀のように祝元の主催で、神事を行う行事があり、この場合は、宮役の中の宮司と総代長のみが参加する。

表 白鬚田原神社年間行事

	月日	神社祭事	とうや行事	内容
1	4月5日	宮地祭		小祭
2	4月26日		神社清掃活動	神元（立平地区）による清掃活動
3	5月31日		神社清掃活動	神元（穴野地区）による清掃活動
4	6月28日		神社清掃活動	神元（岡平地区）による清掃活動
5	7月5日	鎮座祭		小祭
6	7月26日		神社清掃活動	神元（立平地区）による清掃活動
7	8月30日		神社清掃活動	神元（穴野地区）による清掃活動
8	9月6日	仲秋祭		小祭
9	9月20日		神社清掃活動	神元（岡平地区）による清掃活動
10	9月25日		醸造始めの儀	神事、どぶろく仕込開始
11	9月30日		米洗い	祝元・祝組による米洗い
12	10月1日		掛添い	祝元がどぶろくの注ぎ足し
13	10月8日		口開祭・酒造検査	神事、宮役と祝元・祝組によるどぶろくの試飲 税務署職員による立ち会い検査
14	10月11日		神社清掃活動	神元（立平地区）による清掃活動
15	10月12日	潔斎祭	神元座 （霜消し・精進固め）	宮役は小祭 祝元主催の神元座。霜消しでどぶろくの出来栄を 全員で確認、精進固めで大祭までの清廉潔白の意 思統一
16	10月17日	前日祭	神元座 （ハケオロシ）	宮役は小祭 桂川で禊 祝元は神元座を開催、幟や注連縄を準備する
17	10月18日	例大祭 御神幸祭	神元座 （どぶろく祭り）	大祭
18	10月19日		終祭（ハケアゲ）	片付け
19	11月29日		神社清掃活動	神元（穴野地区）による清掃活動
20	12月6日	新嘗祭		大祭 神事に次期祝元と神元代表が参加
21	12月27日		神社清掃活動	神元（岡平地区）による清掃活動
22	12月31日	除夜祭		小祭
23	1月1日	元旦祭		小祭
24	1月31日		神社清掃活動	神元（立平地区）による清掃活動
25	2月28日		神社清掃活動	神元（穴野地区）による清掃活動
26	3月7日	祈年祭		大祭 神事に次期祝元と神元代表が参加
27	3月28日		神社清掃活動	神元（岡平地区）による清掃活動

ウ) 白鬚田原神社のとうや行事

白鬚田原神社の例大祭は、10月17日、18日の両日行われ、一般にどぶろく祭りと呼ばれる。どぶろくを造って神にそなえるとともに、参拝客を接待するところから、この名前と呼ばれるようになった。祭りはとうや行事とは別に県の記録作成等の措置を構すべき無形の民俗文化財となっている。

祭りは、祝元を中心に神元組によって進められる。9月25日の醸造始めの儀によって開始され、酒精検査、口開祭、霜けし、精進固め、前日祭（神元座）、例大祭（神元座）と続き、10月19日の終祭（ハケアゲ）をもって終了する。

9月25日の醸造始めの儀で仕込みがはじまったどぶろくは、10月8日に一部関係者が試飲する口開祭で初めて出来栄えが確認される。同日、神事の前に醸造庫にて税務署職員による立ち会い検査が行われる。昭和21年（1946）から記録が一冊となった「濁酒一件」には、その年の宮司をはじめとした関係役員やどぶろくの仕込み日、口開祭式当日に検査を行った税務局の職員などが現在も記録されて続けられている。

10月12日には、早朝、祝元の家で白鬚田原神社の掛軸が掛けられたあと、霜消しと呼ばれる行事が9時ころから開始される。祝元が「これより霜消しを差し上げます」と発声し、祝組がどぶろくを関係者に注ぎ、全員行き渡ってから全員で「いただきます」と発声してどぶろくを飲んで出来栄えを確認する。これが一回目の神元座の集まりである。神元座とは、祝元が主催となって行う集会のことで、神元と宮役が全員集まる行事である。その後も行事は潔斎祭^{けっさいさい}に続き、神社前の桂川に入っの禊が行われる。禊後、再び神社に集まり精進固めが行われる。精進固めは、祭りの準備をするにあたり、身と心を清める最初の日で、これ以降、祭りが終わるまで不浄な物に触れてはいけないといとされている。宮司から前日祭と例祭による事務連絡がなされた後、祝元に進行役が移り、2回目の神元座が拝殿で執り行われる。祝元の挨拶の後、茶碗が全員に配られ「只今より初



米洗い



醸造始め



どぶろくの仕込



どぶろくの立会検査



白鬚田原神社の掛軸が掛けられた様子

献を差し上げます」の発声で祝組が黒椀にどぶろくを注いで回る。受杯者は、黒椀に直接口は付けず、最初に配られた茶碗に移しかえ、黒椀を隣の人に回していく。最後の人まで行き渡ると祝元が「初献は廻りきれましたか」と発声し、全員で飲み干し、二献、三献と同様に注がれる。三献が終了すると精進固めも終了となる。

17日は、前日祭と14時から神事と神元座が神社で行われ、精進固め同様に祝元の進行でどぶろくを三献差し上げる。

18日の例大祭当日は、最初に神事が行われ、神輿に御神体に移された後、御神幸が行われる。御神幸は、神社を出て、桂川沿いを北に向かって進み、田原家五重塔のそばを通過して御旅所を目指す。そこで神事を行った後、次は祝元になった家まで行き、神社まで氏子の家の近くをなるべく多く通るルートで戻る。この御神幸の間、神社を訪れた参拝客にはどぶろくが振舞われている。神輿が神社に戻ると、御神体を本殿に戻す神事が行われる。神事後、拝殿で最後となる神元座が開かれる。ここでは宮司が、進行役となり、「初献を差し上げます」から始まり、3献どぶろくが注がれる。その後オリベ（折幣）という持ち帰り用の半紙を挟んだ特別な御幣と板の上に載った米数粒と小判型の餅4枚を重ねたゴバン（御盤）が各人の前に配られ、「御飯をいただきます」という宮司の声に合わせて、添半紙で包み懐に入れる。目の前からすべて茶碗や折幣が下げられて神元座終了となる。

例大祭翌日の19日に終祭（ハケアゲ）という幟等の片付けが行われて行事終了となる。



潔斎祭（桂川での禊）



精進固めの儀



例大祭の御神幸



例大祭のどぶろく祭



折幣を持つ神職



図 白鬚田原神社とうや行事御神幸のルート（その年の祝元の家にも行く）



御神幸の様子



御神幸の様子



白鬚田原神社前



白鬚田原神社境内

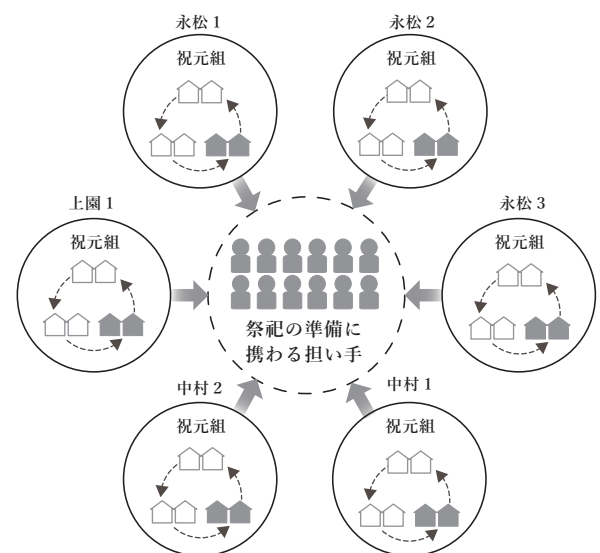
3)-2 田原若宮八幡社のとうや行事

ア) 田原若宮八幡社の行事に関わる組織

田原若宮八幡社の行事に関わる組織には、神官を筆頭に、氏子会長1名、宮役3名、馬乗1名の神社側の組織とかつて祭祀の代行までも担っていた地元組織である神元、現代になって組織された行事の準備を担う地元組織である祝元組がある。

国立歴史民俗博物館研究報告『宮座と社会：その歴史と構造』(2011)の報告によれば、宮役は大正2年(1911)ころから新たに作られた役職で、これ以降、田原若宮八幡社の祭祀は神元から宮役に移行された。決定的となったのが昭和21年(1946)の氏子協議によってである。宮役は3名からなり、宮役の代表である宮代官1名が祭祀のすべてを取り仕切る。2人目は、はゴクシヨ(御供所)とよばれ、供物の調整を行う。3人目は鳥追といい、宮代官を補佐して儀礼の遂行にあたる。その他、馬乗は11月3日の馬揃えの神事と神元座にのみに参加する役で、かつての流鏑馬行事の担い手の名残りだという。

一方、地元組織である神元は、明治38年(1905)以前は特定の家筋17軒が順番に祭祀の中心となり祭祀を行ってきた。その後、氏子すべての家を担い手とするため17組(現在は16組)の神元組を作り、宮役が登場するまでとうや制に基づいて祭祀を行った。さらに昭和45年(1970)には、戸数が減少し神元組だけでは祭りの当番を維持できなくなったため、新たに祝元組を編成し、永松地区の中で上園1組、中村2組、下村3組にわけ各組が順に祭祀の準備に携わるようになった。さらに現在では、各祝元組(現在の行政区の班範囲と同一)から1名(班長)と同班で班長から指名された1名、あわせて2名が出て祭りの準備を行う方法に変え、組ごとに輪番で当番でまわってきた形態から、各組から1名を出す形態に変化した。



田原若宮八幡社の地元組織

イ) 田原若宮八幡社の年中行事

現在の田原若宮八幡社の行事は12日ある。主催者である宮役3名はすべての行事に参加する。宮役の代表である宮代官は宮司に代わって、1月1日の元旦祭、10月31日の神送り祭、11月30日の神迎え祭、12月31日の大祓祭などの神事を代行する。その他の小祭の神事には宮司、宮役3名、氏子会長が参加する。一方、地元組織である神元組は現在も組織として存在するが、祭祀は宮役、祭りの準備は祝元組に機能を移したため、11月3日に開催される大祭の神事と神元座という集会のみにしか参加しない。そのため、すべての行事がとうや行事として行われていたと考えられるが、現在は祝元が参加する10月28日の羽毛降り祭から11月4日までのハケアゲ(羽毛揚げ)までがとうや行事といえる。

表 田原若宮八幡社年間行事

	月日	神社祭事	とうや行事	内容
1	1月1日	元旦祭		小祭 宮役のみで神事
2	2月初卯日	卯祭り (新年祭)		小祭 宮司・宮役・氏子会長が参加して神事
3	4月9日	例祭		小祭 宮司・宮役・氏子会長が参加して神事
4	9月15日	放生会祭		小祭 宮司・宮役・氏子会長が参加して神事
5	10月28日		羽毛降し祭	"宮司・宮役・氏子会長・祝元組が参加。 神事後に注連縄等の準備"
6	10月31日	神送り祭		宮役のみで神事
7	11月2日	前日祭		小祭 宮司・宮役・氏子会長が参加して神事
8	11月3日	神幸大祭	神元座	"大祭 全員が神事に参加。 神事後、神元座と御神幸が行われる"
9	11月4日		ハケアゲ(羽毛揚げ)	祝元組だけで幟や注連縄の片付け
10	11月30日	神迎え祭		宮役のみで神事
11	12月初酉日	酉祭 (新嘗祭)		小祭 宮司・宮役・氏子会長が参加して神事
12	12月31日	大祓祭		小祭 宮役のみで神事

ウ) 田原若宮八幡社のとうや行事

10月28日は、羽毛降しが行われ、神事後にお祓いの済んだ注連縄を御旅所と永松地区内の4ヶ所に張る。11月2日の朝、宮役は神事や神元座で使う餅を搗き、祝元は祭りの設営と神元座に使用する本膳と半膳の準備を行う。本膳は板の上に細長い小判型の餅4枚と強飯等を載せ、半膳は餅一重と勝栗を載せる。

3日の神幸大祭前、午前8時に桂川で宮司と宮役のみ禊を行う。その後、拝殿左手前に設けた祭壇の前で馬揃え神事を行い、拝殿内で直会をしてお神酒と茹でた大豆、強飯を食べる。この時参加するのが馬乗である。その後、宮司は本殿両脇の社を祀り、宮代官は拝殿横の祠を祀る。大祭は午後から始まり、神輿に御神体を移す神事が行われる。会場を拝殿から社務所に移し、神元座を行う。正面に宮司、宮代官、馬乗、氏子会長が着座し、両脇に16人の神元組の代表が座る。神元座では正面4名には本膳が供えられ、16名の神元には半膳が供えられる。また、神元座の最中には、正面からオクダリ



神元座に参加する宮司と宮役



神元座で給仕する祝元組



神元座の本膳

(お下り)、オノボリ (お上り) という杯を順に回し、再び戻す所作をしてお神酒と甘酒が振舞われる。この時の給仕を行うのは祝元組である。最後には、宮代官の「御神幸をよろしく」の発声により、参加者は膳に載っている餅等を半紙に包み、神元座を終了して御神幸に移る。御神幸は、最初に桂川対岸にある御旅所に向かい、神事後、集落内をお下り・お上りをして神社に戻り大祭終了となる。4日朝には、祝元組によって羽毛揚げという後片付けが行われて行事終了となる。

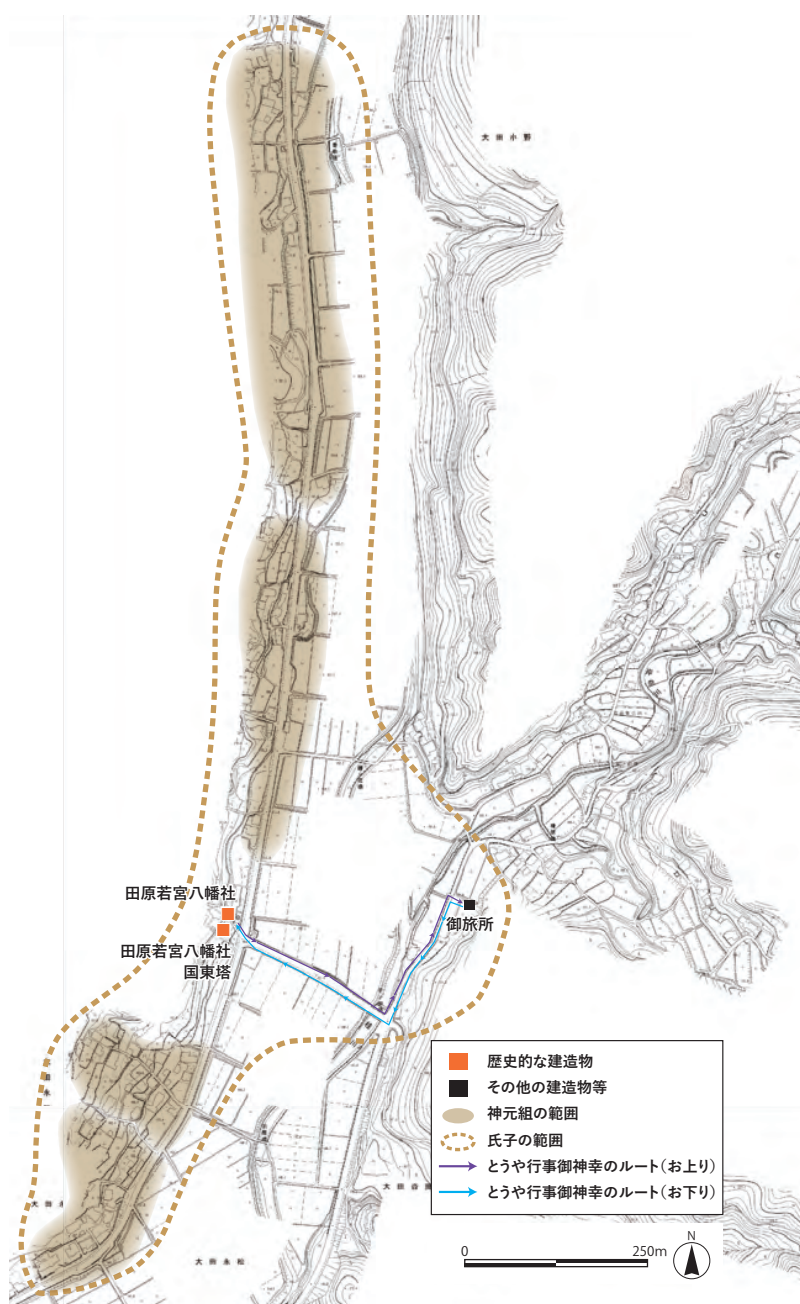


図 田原若宮八幡社のとうや行事御神幸のルート



御旅所の様子



御神幸

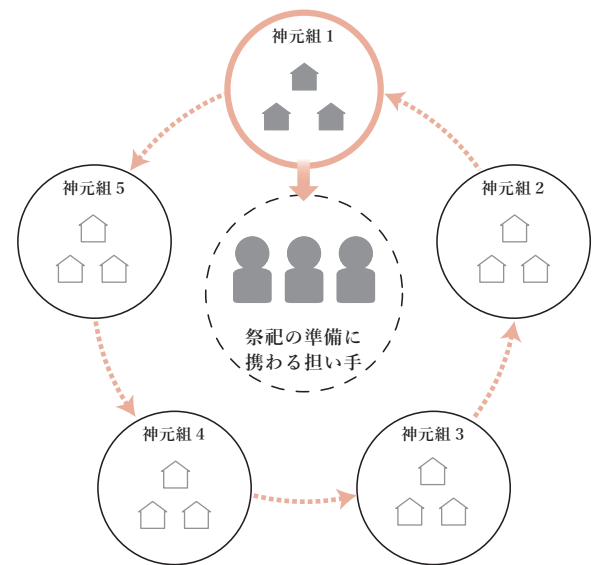


御神幸

3)-3 比枝神社のとうや行事

ア) 比枝神社の行事に関わる組織

比枝神社には、地元在住の世襲神職はおらず、今でも祭りの時は他所から招いている。そのため神職の代行（現在は補佐役）として代官、副代官、御供所という3役が宮付としておかれている。かつてはいずれも神元の役であったが、現在は宮総代という区の役員が交代で務めている。代官役は下平原の野田家が世襲していたという。副代官と御供所は特定の家筋ではなかった。当初の神元は18戸あり、カサ（上）8戸とシモ（下）10戸に分かれ、上は中河内3戸、中村4戸、下平原1戸で、下は下平原1戸、本明組5戸、西山4戸でそれぞれ構成されていた。祭りでは上と下からそれぞれ1戸ずつの神元が出る。神元1戸とそれを助けるテゴ（補佐する家のこと）4戸の計5戸で1組を作り1年交代で比枝神社の祭りを担っていた。田原河内は別に山の神を祀っていたため神元ではなかったが、明治42年（1909）の合祀で2戸が神元として参加するようになった。そして昭和5年（1930）以降、ソウジガン（総神元）といって村全戸が神社祭祀に関わるようになった。この時は18組の神元組を作り、その代表が神元として参加する。現在の神元組は人口減少により戸数が減り、組数も5組まで縮小している。



比枝神社の地元組織

現在の比枝神社の祭祀には、宮司、氏子会長1名、宮付3名、区3役（区長・副区長・会計）が神社側の役としてあり、地元側は神元組（座前）5組が1年交代で祭りの準備を行っている。

イ) 比枝神社の年中心事

比枝神社の年中心事は12日ある。かつては行事のすべてをとうや行事の中で、代官の世襲家と神元組で行っていたが、現在では神社祭事の準備のほとんどを宮役である代官、副代官、御供所が行っている。また神社祭事は基本的には宮司が神事の司祭となるが、1月1日の元旦祭、12月31日新嘗祭・除夜祭は、代官が代行して神事を行う場合があり、4月29日の敬老会と11月22日の前夜祭は代官が中心となって神事や準備を行っている。

地元組織である神元組（座元）の現在の役割は、11月17日の神幸大祭の小口開けの大祭準備と11月20日内役祭の一部として行われる神元座という集会での新旧の引継ぎへの参加である。4月12日の祈年祭の小口開けも神元組（座元）が準備の担当であったが、平成18年（2006）からこの役割を宮役に移した。そのため、現在は11月17日と11月20日がとうや行事として行われている。

表 比枝神社の年間行事

	月日	神社祭事	とうや行事	内容	役割
1	1月1日	元旦祭		小祭 宮司または代官による神事	宮司・氏子会長・宮付
2	3月21日	百夜祭		小祭 宮司、氏子会長、宮役が参加しての神事	宮司・氏子会長・宮付
3	4月12日	祈年祭の 小口開け		小祭 宮司、氏子会長、宮役が参加しての神事	宮司・氏子会長・宮付
4	4月15日	祈年祭		小祭 宮司、氏子会長、宮役が参加しての神事	宮司・氏子会長・宮付
5	4月29日	敬老会		小祭 代官による神事	
6	7月25日	天神祭 水神祭 大祓祭		小祭 宮司、氏子会長、宮役が参加しての神事	宮司・氏子会長・宮付
7	11月17日	神幸大祭の 小口開け	ハケオロシサイ (羽筆降祭)	小祭 宮司、氏子会長、宮役、神元(座元)が参加しての神事 神事後、宮役と神元で注連縄等の準備	宮司、氏子会長、宮付、 神元(座元)
8	11月20日	内役祭	神元座	関係者全員参加 神事後、神元座を開催。新・旧の神元の引継ぎを行う	宮司、氏子会長、宮付、 神元(座元)
9	11月22日	前夜祭		小祭 氏子会長と宮役で神幸大祭の準備	宮司・氏子会長・宮付
10	11月23日	神幸大祭		大祭 関係者全員参加 神事後、御旅所まで御神幸	宮司、氏子会長、宮付、 神元(座元)
11	12月22日	冬至祭		小祭 宮司、氏子会長、宮役が参加しての神事	宮司・氏子会長・宮付
12	12月31日	新嘗祭 除夜祭		小祭 宮司または代官による神事	宮司・氏子会長・宮付

ウ) 比枝神社のとうや行事

比枝神社の年間祭祀は全部で12日間である。この内、神元が関わるのは11月17日のハケオロシサイ(羽筆降祭)から20日のウチャクサイ(内役祭)、23日の神幸大祭までである。

11月17日の羽筆降祭は別名小口開けともいう。神社の申殿で、宮司、氏子会長、宮三役、神元(座元)が集まり、副代官の進行で神事が行われる。最初は代官により祝詞奏上が行われ、その後宮司による修祓や祝詞奏上などの神事が行われる。神事が終わると境内や御旅所など必要な場所に注連縄を張って祭りの準備を行う。

11月20日の内役祭は別名神元座という。神事は羽筆降祭同様の形で行われ、神事終了後、場所を社務所に移して神元座を行う。神元座では、氏子会長を上座にその後年齢順に着座する。進行は神元に移り、儀式を始める。以前は「上りさん、下りさん」という杯を回すことを行っていたが現在はしていない。しかし、献立は以前のままで、白あえ、おひたし、酢和え、ご飯、味噌汁、漬物、御神酒が出される。神元座の中でも大切な儀式が食事後に行われるライトワタシ(来当渡し)である。来当渡しは、本年、来年の神元が、氏子会長の前に進み出て、神元帳(神元組の名前を記した木板)、種粃俵、茶碗を持っていき、双方の申し継ぎ、引受の挨拶をして新旧以外の神元組の人から酌をしてもらい、旧、新の順に杯を乾す。その後は、自由に宴会が行われ、神元座を終了する。

11月23日の神幸大祭は、神元の太鼓の合図で神事開始され、副代官の進行をする。これまでの神事同様、代官、宮司による修祓や祝詞奏上が執り行われる。神事が終わると御神幸に移る。神輿を担ぐ輿付き役が禊をしている間に、神元は本来の御旅所であったイツキ（斎）の森と現御旅所に御幣や餅を供えるために走る。禊や御旅所の準備が整うと御神体を神輿に移し、御神幸を行う。かつては斎の森という桂川の対岸にある元宮を御旅所としていたが、降雨により渡れないことが度々あったため、現在は、比枝神社と同じ岸の神社北方200mの道路際に御旅所を移した。御旅所までは稚児による鉄砲や御弓、毛槍と楽人によるお囃子を奏でながら御神幸を行い、神事後、神輿だけが集落を練り歩く。神社に戻り、御神体を戻す神事を行い、その日のうちに片づけを行って行事終了となる。



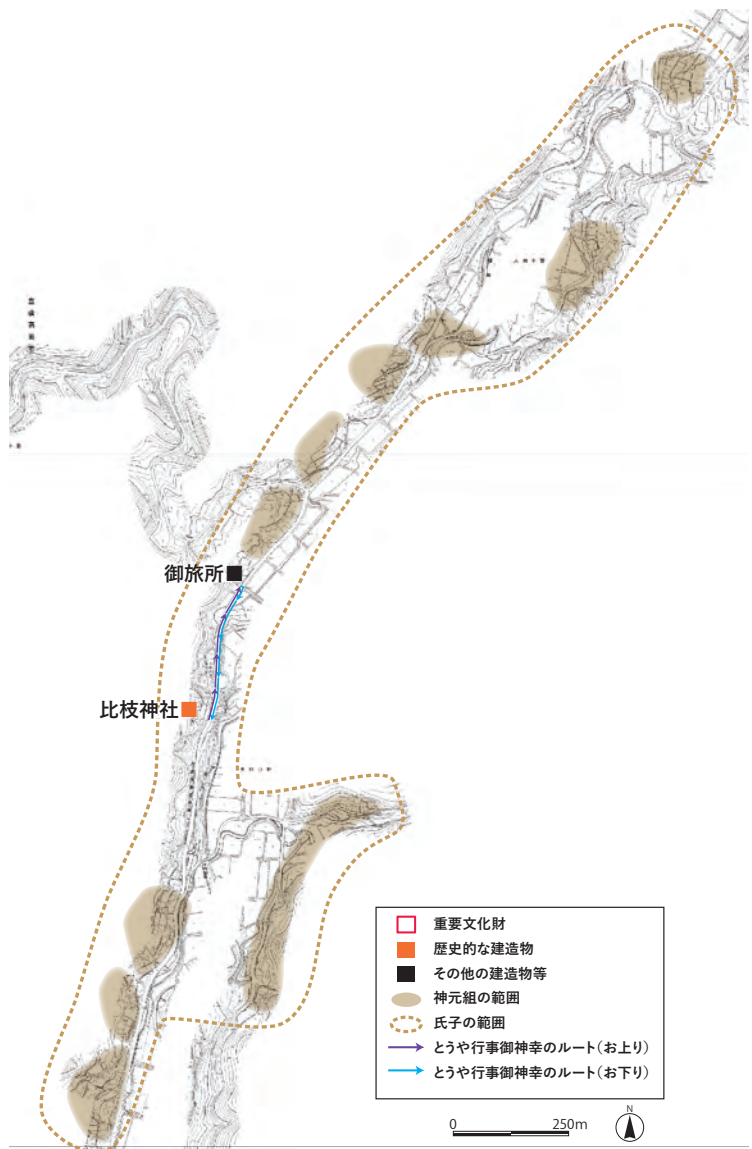
社務所での神元座



御旅所での神事



御神幸ルート



比枝神社とうや行事神元座範囲と御神幸のルート

(3) まとめ

行事の多くは厳かな雰囲気の中神社で執り行われる。一方、禊を行う川や、御神幸の背景となる集落の家々、稲穂色づく田園、国指定文化財である田原家五重塔をはじめとする石造物など、集落一体が行事の背景となっている。

以上より、地域の人々によって受け継がれる、とうや行事が神社や石造物、集落の町並みと一体となって、伝統的な習わしを反映した歴史的風致を形成している。



図 とうや行事にみる歴史的風致の範囲

コラム || 石塔の種類

本市には様々な種類の石塔が見られる。特に大田地域には、およそ2500もの五輪塔が残っている。これには、^{ろくごうざん}六郷山文化の影響や、材料となる良質な石材が国東半島でたくさんとれることが背景にあると考えられている。

●国東塔

信仰の厚い国東の人々が、より丁重な宝塔をとの願いから生まれた形といわれている。

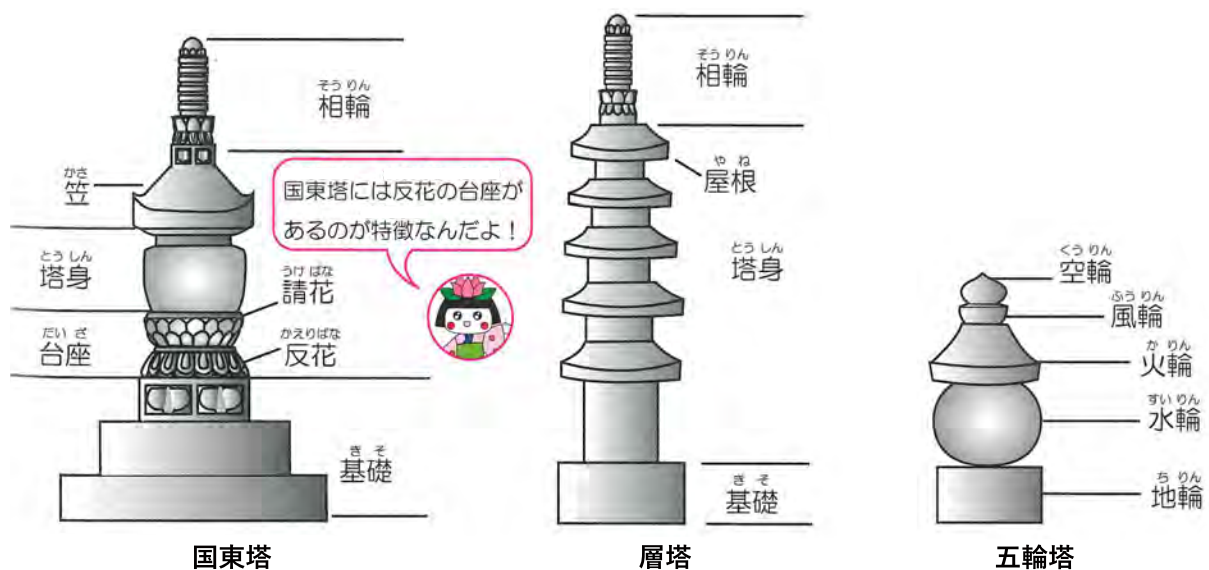
国東塔には^{かえりばな}反花の台座があるのが特徴である。

●層塔

屋根の形の笠を三重以上重ねた塔のこと。層の数は基本的に奇数で造られる。

●五輪塔

地、水、火、風、空を合わせて宇宙の五大要素を象徴するものである。



石塔の種類（『きつきの歴史・文化財なるほど!ブック』を基に一部加工）